

対話イン八戸工大 FY2015 詳細報告

報告者 針山日出夫



【概要】

今回で11回目となる八戸工大での対話会が2月5日に開催された。今回の企画は、同学に於ける4年間の原子力関連カリキュラムの一環として同学3年生を対象とする「原子力体験研修」の一環として実施されたもので参加者は学生23名、教職員5名、参加シニア10名の総勢38名。

学生とせんべい汁を食しながら互いが打ち解け、その流れをグループ対話に繋ぐことで本音ベースの活発で深みのある対話が実現。今回は午前中の学生だけの討論・基調講演・グループに分かれての対話は全て「放射性廃棄物処理に係るもの」で統一された同調性の高いプログラムとなった。学生の発表内容では、一連のカリキュラムでエネルギー問題に対する論点整理が出来上がっており、それを下敷きにしてポイントを外さない立派なもので質疑応答でも堂々と意見を述べる学生の姿は印象的で頼もしいものであった。シニアにとっても、世代を超えた対話は多様な内容で学生のこれからの将来の可能性を感じるもので、達成感に満ちたものであった。八戸工業大学の先生方のエネルギー問題に対する熱い視線と長年のご尽力に敬意を表したい。来年も2月頃に対話会を計画するとのこと。

1. 対話会進行プログラム概要

日時：平成28年2月5日(金) 10:00～17:30 (シニアは12時から参加)

場所：八戸工業大学 メディアセンター大会議室

参加者：(学生) 23名 [機械情報技術、電気電子システム、システム情報工学、バイオ環境工学・・・各専攻学科の3年生]

(教官) 佐藤教授、野田教授、武藤教授、石山教授、四甕教授

(職員) 斎藤主事

(シニア) 岸昭正、阿部勝憲、工藤昭雄、山田信行、高橋実、坪谷隆夫、西郷正雄、三谷信次、大野崇、針山日出夫

議事全般：

1. 開会の挨拶、参加シニアの紹介 13:20 ～ 13:35
2. 基調講演（講演 45分、講師：SNW 坪谷副会長） 13:35 ～ 14:30
演題：「学生諸君と高レベル放射性廃棄物処分を考える！」
3. グループ対話： 14:30 ～ 16:30
4. グループの代表による発表 16:30 ～ 17:30
5. 講評（SNW 工藤昭雄氏）と阿部シニアの閉会挨拶 ～ 17:40

2. 基調講演

基調講演はSNW 副会長坪谷氏から、「放射性廃棄物の処理処分問題の基本」に係る最新状況を踏まえた体系的で簡潔な要点説明があった。説明項目は以下。

- ① 高レベル放射性廃棄物の発生量と一般廃棄物発生量の比較
- ② 高レベル放射性廃棄物とはどんなものか、どのように処理するのか
- ③ ガラス固化体とはどんなものか？
- ④ 高レベル放射性廃棄物の地層処分と社会への定着に向けた取り組み
- ⑤ 地層処分技術の開発と安全確保の基本3要件並びに安全評価
- ⑥ 処分に係る制度整備と事業の仕組み
- ⑦ 海外最新動向の考察と我が国でのあり方の総括

3. グループ対話の概要

参加者全員が5グループに分かれて、それぞれのグループで「放射性廃棄物の処理処分」について対話した。各グループでの対話概要を以下に列記する。

<グループ① 対話概要>

報告者：大野崇

参加者：学生3名（江馬、小野寺、井澤・・・機械情報技術学科）

シニア2名（阿部勝憲、大野 崇）

(対話内容)

シニア（阿部氏）がファシリテータを務め、最初に、シニアと学生の自己紹介を行い、出身地や趣味などを話してもらった。学食でのせんべい汁の昼食を一緒にしているので、最初から固い雰囲気はなかった。学生の出身地は北海道出身者が1名、青森県が1名、山形県が1名と全て近隣の学生であった。午前中に学生同士でテーマについて話し合い午後の対話会臨んだということであるが、高レベル廃棄物の話は初めてということであり、シニア側から疑問・意見を引き出す形で進めた。

（学生からの主な質問）

- ① 地層処分は地下に埋設するということであるが埋め戻すのか。最終処分場ということなので埋め戻して永久保管と考えていた。→何かあった時に取り出せるようにしておくか埋め戻すかはまだ結論が出ていない。
- ② 高レベル廃棄物はガラス固化体に閉じ込めるということであるが、ガラス固化体は人が近づいても安全か。被爆するのではないか。→オーバーパックにより十分な遮蔽がなされており、人が近づいても安全である。
- ③ 高レベル廃棄物はどのくらい保管すればよいのか。300年というがもっと長い半減期のものがあるのではないか。→高レベル廃棄物のみによればFP（フィッションプロダクト）とMA（マイナーアクチド）なので300年で毒性が消える。直接処分であるとプルトニウムが残るので1万年経たないと毒性が消えない。日本は、再処理を選定。
- ④ 重量物を運搬するので最終処分場は海のそばがよいというが、六ヶ所を最終処分場とすれば一石二鳥ではないか。→六ヶ所村は最終処分地しない約束で地元を受け入れてもらっている。また、地下構造を最終処分場の観点から調査しておらずできない。

（シニアからの問いかけ）

- ・最終処分問題は、反対が根強く長年決着を見てきていない。正直、高レベル廃棄物と聞いた時のイメージはどう感じるか？ →今日初めて話を聞いた。これまでは危険というイメージであった。
- ・地元から見て、何をしたら処分地を受け入れてもらえると思うか →やはり処分場ができることで雇用等の地元の受ける恩恵である。
- ・床はピカピカに清掃するなど施設の管理には手を抜かないのが現場の人の心意気である。研修で女川、六ヶ所村、建設中の大間原発などの施設見学を行ってどう感じたか？ →技術的にしっかりと行っていると感じ、これまでの原子力は何となく不安という思いが払しょくされた。

（グループ発表）

- ① 使用済み燃料を再処理すると容量が少なく直接処分に比べ処分場の面積が小さくて済むことが分かった。
- ② ガラス固化体になると長期間安定に保管できることがわかった。
- ③ 最終処分場を受け入れてもらうには地元の信頼を得ることが必要。

＜グループ② 対話概要＞

報告者：岸昭正

参加者：学生 5 名（中村、中村、倉内、佐藤、神 機械情報工学科 3 年生）
SNW2 名（西郷正雄、岸昭正）

（対話内容）

学食でのせんべい汁の昼食を一緒にしているので、最初から固い雰囲気はなかった。学生の出身地は青森県が殆どの他、宮城県出身が一人だった。

対話は西郷さんがファシリテータになって進め、全員の発言を促すため各自に質問事項を書き出してもらい順繰りにそれに対応していった。問題によってはシニアも即答できないものがある。お互いに疑問を出し合うのも対話だろう。午前中に学生同士で高レベル廃棄物処分のテーマについて話し合い午後の対話会臨んだということで、宇宙処分や海中処分などについて興味を持ったようだ。

（学生からの主な質問）

1. 処分の技術はどこまで進んだか⇒ 基調講演の中で坪谷さんが詳しく述べているので資料を勉強するように促す。
2. 宇宙処分の可能性はどうか⇒ 近い将来に実現できるものではないが、もっと遠い将来であれば可能性があるかもしれない。これは責任ある回答とは思えないがこちらも十分考えたことが無いので答えられない
3. 埋設の手順は？ 人が埋設箇所まで持って行くのかロボットにさせるのか具体的な手段を知りたいとの問だった。⇒これには最後に坪谷さんに応えて貰った。詳細はいまだ未解決ということらしい。
4. 高レベル廃棄物はガラス固化体に閉じ込めるということであるが、ガラス固化体は人が近づいても安全か。被爆するのではないか。→オーバーパックにより十分な遮蔽がなされており、人が近づいても安全である。
5. ガラス固化体のハンドリング技術⇒ これも④と同様の疑問だが英仏からの返還廃棄物については下北の日本原燃で実績があることを説明
6. 高レベル廃棄物処分場の剪定は国民の反対が強く決定できずにいるのだから原子力発電は止めるべきではないかと（意見）⇒脱原発は別のリスクが沢山あり、脱原発では解決できない問題がある。現実的にはベストミックスでしか解決できないことを話す。また、脱原発でも過去の使用済み燃料の処分地は必要となることを納得してもらう。
7. ウラン資源は将来的に確保できるのか、その展望は⇒ FBRや海水ウランの話にも議論が発展した。
8. 地震動は地下深いほど揺れが少ないので地下処分は深いほどよいのか⇒ 人間生活圏からの隔離が目的なので300m程度の深さが必要と言われているが、
9. 高レベル廃棄物は熱源として有効活用できないのか⇒ 経済性の問題だろう。このとき発電所の温排水利用についても話題が膨らんだ。
10. HLW処分とTRU処分の併設について⇒ これも最後に坪谷さんから

回答してもらった。TRUはHLWの約10%程度の量なので、併設が経済的と考えられている様だ。我々のグループでシニアが応えられなかった問題でした。

11. 海洋処分を行わない理由は何か⇒ 国際条約で海底への処分は禁止されている。

対話をとおして原子力発電を続けることのリスクと、止めた場合のリスクを十分慎重に比べて判断することの重要性を訴えた。これで学生はエネルギー政策決定に必要なバランス感覚の必要性にある程度気づいてくれたように感じた。

<グループ③ 対話概要>

報告者：工藤昭雄

1. 参加者

学生： 機械情報工学科3名（1名欠席）

シニア： 坪谷、工藤

2. 対話内容

例年通り、学食でせんべい汁の昼食をとり、打ち解けた後、対話会に入った。学生に対話進行役をお願いしようとしたが、少し難しいと感じたので、シニア側は工藤が進行役を務めた。

(坪谷氏の基調講演に対する学生の感想)

A： 技術開発が進んでいる事は理解できた。しかしより重要なのは実行政策であると思った。

B： 自分の知識は増えた。断層の問題は理解が進んでいないと感じた。

C： 最終処分のスケジュールが遅い。公募も簡単でないと思う。候補地に対する経済的援助をもっと明確にすべきと思う。

(午前中の学生間の議論から出た疑問、意見等)

学生側から“なぜ青森県には原子力施設が集中しているのか？”との質問あり。シニア側の回答は以下の通り。

以前から下北の広大な土地を活用した開発プロジェクトが進められて来、青森県も期待していたが、順調には進まなかった。一方電力業界は核燃サイクルを完成させる為、広大な施設用地をもとめており、青森県側の経済振興策と合致し、両者が合意し進んできたと考える。このような施設を誘致すると、住民も増加し、教育レベルも上がり、地域が活性化する効果もある。

(何故最終処分場に対する理解がすすまないのか？に関する対話のサマリー)

— 政府と国民の間の信頼が不足している。

— 実行政策、法律の制定が不十分で、遅い。

ある学生は、原子力は国営化した方が良いのではと意見を述べた。これ

に対し、シニア側から仏がこれに近いが、国営化したらうまくいくとは限らず国営化の弊害もある旨コメントした。

－ 情報公開が不十分

(その他特記)

進行役の工藤（最終処分に関しては、学生と同じ素人）から学生に代わって坪谷氏に次のような質問を行った。

「遠い将来、仮に予想を超えて地下水に放射能が移行していることが判明した場合でも掘り返し対策をとれる埋設方法を採用していますとした方が、住民の理解を得やすいのではないかと思うが、どのように考えるか？」

これに対する坪谷氏の意見は「回収可能性の確保」は現実的ではなく、むしろ汚染を拡大させると否定的なものであった。

その通りかも知れないが、1000年先、10000年先のことなど分かるわけがないと思っている人に、どのような説明をしたら納得が得られるのか、難しさを改めて感じた。

<グループ④ 対話概要>

報告者：高橋実

(参加者) 学生 情報システム科5名、電気科1名
シニア SNW 三谷、SNW東北 高橋

(対話内容)

学生諸君は午前中に「最終処分への流れ」というエネ庁のDVDを見て、処分地問題の解決策として、技術者の立場で今後自分達に何ができるかをいろいろ議論していた。

(1) 情報技術者としてできること、したいこと

- ・ 処分場での作業の自動化、特にトラックの運転の自動化、(作業時間を短縮すれば結果として運転員の被ばくが減少する)
- ・ IT利用、ホームページやSNSを活用して理解活動を進める
- ・ ロケットで放射性廃棄物を宇宙に飛ばす

(2) 出来ないこと、したくないこと

- ・ 反対意見をなくすこと
- ・ 高レベル廃棄物に近づきたくない

(3) 知っていること

- ・ 処分地はまだ決まっていない
- ・ 長期間保管する必要がある

(4) 知らないこと

- ・ 地下で高レベル放射性廃棄物が漏れたらどうなるか
- ・ 地下での埋設作業時間、特にトラックでの作業時間はどのくらいか、運転手

は安全なのか等の疑問が出された。

午後のシニアと学生との対話は、上記(4)の知らないことを中心に行われた。廃棄物の漏洩については、1) ガラス固化体の安定性、2) 深層地下水は酸化しにくいこと、3) 深層地下は圧力が高く動きにくいこと、

また、輸送時の安全性は、輸送容器によって担保されていること。深度での輸送トラックの運転手の被ばく等については、現行の使用済み燃料の輸送でも輸送容器の十分な遮蔽により問題になっていないこと等を議論した。

学生諸君からは、情報技術者として、HPの充実、SNSの活用等により、自分達が関係する地元などが処分地の候補に上がった場合に備えて、地元住民への情報提供の仕組みをつくるのに貢献できるという意見があった。今回の対話は、学生諸君として、高レベル放射性廃棄物処分について、自分達の専門の立場から何ができるかを考える良い機会であった。

<グループ⑤ 対話概要>

報告者：山田信行

(参加者) 学生：電気工学科 3年生 6名

シニア：針山日出夫 (SNW)、山田信行 (SNW 東北)

(対話内容)

最初に、シニアと学生の自己紹介を行い、出身地や趣味などを話してもらった。学食でのせんべい汁の昼食を一緒にしているので、最初から固い雰囲気はなかった。出身地は八戸出身者が3名、青森県が2名、岩手県が1名と近隣の人がほとんどである。

対話は、以下についてシニアからの問いかけから始めた。

- ① 坪谷氏の基調講演を踏まえて、放射性廃棄物処分をどう考えているか、
- ② 学生たち就活を控えて、自分のアピールポイントは何か、
- ③ (原子力の) 安全とは何か、

(対話の特記事項)

- ①放射性廃棄物処分をどう考えるか
 - ・研修で六ヶ所村や建設中の大間原発などの施設見学を行っており、技術的にしっかりと行っていると感じている。
 - ・施設見学前は原子力に対して幾分不安があったが、しっかり取扱われていることがわかった。最終処分場を六ヶ所に押し付けられるのではないかと不安がある (⇒施設建設を受け入れる時に、最終処分場にしないという国と県との約束があると説明)。
 - ・原子力は必要である。原発を運転する以上、廃棄物が生じるのは仕方がない。高レベルと低レベル放射性廃棄物を分けて処理しているのはよい。最終的な処分場のイメージはわからない。
 - ・原子力は必要。廃棄物を貯蔵する場所がなくなっているのが心配。

- ・以前から原子力は必要と思っており、今も変わらない。地元自治体が（施設の受け容れを）納得しない理由がわからない。
 - ・原発は必要である。活断層など未解決な問題があり、場所を決めるのには時間がかかると思っている。
- ②自分のアピールポイントは何か
- ・有言実行　・コミュニケーション能力の高さ　・強みがないということに気付いた　・誰とでも協力できる。自分から率先してやる　・先を読んで順序立てて行動できる　・我慢強い
- ③（原子力の）安全、安心とは何か
- ・設備と心意気　・余裕がある状態　・事故が起きない、対応できる　・普通に日常的な生活ができる　・対策ができる　・次の対策に繋がらない

（学生代表のグループ⑤の発表の要約）

- ① 原子力は必要である。廃棄物は発電に伴い発生するものである。
日本では 8 割の人が原子力に反対であるが、（シニアの話では）韓国では 7 割の人が賛成である。
高レベル廃棄物処分について国民が理解して早く決まって欲しい。
マスメディアがマイナスの面ばかり報道しているが、もっと勉強して正しいことを知りたい。
- ② 安全とは何か⇒リスクと便益を考えて、自分たちがどれくらい許容できるかということ。
今回の対話で、原子力の安全とは何かについて考えさせられた。また、原子力は今まで以上必要と思うようになった。このことをたくさんの人に発信して行きたい。

4. 参加シニアの感想

以下に参加シニアの感想、所感を列記する（順不同）。

<工藤昭雄>

1. 4回連続して参加しているが、対話活動は確実にレベルアップしていると感じる。
2. これは佐藤先生他の教育の成果であろうと思うが、せんべい汁昼食からスタートするやり方の効果も大きいと思う。
3. 今回は共通テーマでの対話であったが、学生達の考えがより広く知ることが出来たという意味では成功であったと思う。
4. 高レベル放射性廃棄物地層処分についてはSNWのメンバーも詳しい人は少なく私は坪谷さんと同GRになったので、学生に代わっていくつか質問した。学生の理解に役立てようと思っておこなったが、効果の程は何とも言えない。

5. 第3GRとしては、学生との対話は

- (1) 技術開発が進んでいる事が理解出来た。
- (2) 問題は政府の覚悟と実行力である。
- (3) 試験施設の公開、説明会の開催を通した一層の理解促進を図ることが必要である。

で纏まると思っていた。しかし発表は“何故青森県には原子力施設が多いのか？”等随分異なるものであった。講評で若干注意したが、どうも午前中の議論がそうであった模様。良い対話が出来たと思う反面、学生が十分納得した議論ができたのか若干迷いを感じる。

<岸昭正>

今回11回目となった八戸工大学生との対話だが、小生は第1回目にも参加し、その後も何回か参加してきた。大学側の指導によるようだが、この学生はいつもスーツを着ネクタイを付けて参加している。気持ちは社会人見習いとしてシニアに対応しているように見える。数年前から始まった昼食に学生と一緒に八戸名物のせんべい汁を食べながらの自己紹介は、堅苦しい気分を和らげ対話を弾ませるのに確かに効果が出ている様だ。学生の中には青森県内の原子力産業に就職したいと考えている学生もいて、頼もしかった。質問は廃棄物処分に集中していたが、坪谷さんの基調講演大いには参考になったはずだ。午前中一杯自分たちで放射性廃棄物についてグループで勉強して考えた質問が午後の対話で出され、シニアが回答する形で話は弾んだが、坪谷さんが基調講演の中でちゃんと説明済みの内容も質問に出てきたりして、資料を再確認させることもあった。しっかり理解してもらうには繰り返すことも必要なようだ。

<高橋実>

我々と対話したグループ4の学生諸君の大半は、午前中に高レベル処分に関するDVDを見て、それなりに考えていたようだ。佐藤先生等の指導もあったのだと思うが、今回の対話は、彼ら、彼女らが、自分の専門分野で、どのような対応ができるかを考える良い機会になったようだ。HPやSNSを活用して情報の共有化を図るのに、自分の技術を生かせるとの意見があったのは心強い。

ただ、気になったのは、前回の山形、そして今回の八戸の2回のみでの参加で言うのは、ちょっとおこがましいが、私の参加したグループに関しては、私も含めてシニアの発言が多すぎると思う。少なくとも時間の半分以上は、学生の意見を聞くべきであり、ファシリテーターとしての技量が十分でなかったとの反省がある。シニアの意見を聞かせそれをまとめさせるのが対話の目的ではなく、例え支離滅裂でも、学生の本音を聞くシニアのファシリテーターとし

での技量向上の研修が必要ではないか。

<山田信行>

全員が原子力に賛成ということで討論の深まらないところもあったが、施設見学を行って実際に現場を見て知るということが大きなことを痛感した。

「安全とは何か」というシニアの問いかけに、意表を突かれた感じで戸惑っていたが、普段当たり前であったことを自分で考えるよいきっかけが与えられたのではないかと思う。また、グループ発表の個人感想のなかで「楽しかったです」という発言もあり、今回の対話の意義を感じた。

<大野崇>

学生は20歳と若く、全員機械工学専攻で原子力に対する偏見は一切もっておらず、大先輩から知識を吸収しようという姿勢に好感を持った。高レベル放射性廃棄物の勉強が始めてということもあり、最初は、何を発言してよいか戸惑っていたが、対話を進めるうちに積極的な発言をするようになった。また、現場の見学は学生にとって「百聞は一見に如かず」の貴重な経験となったのではないか。今回もいろいろお世話いただいた、佐藤先生や、斎藤先生に御礼申し上げたい。

<坪谷隆夫>

1. 恒例のせんべい汁の昼食会は学生諸君とのアイスブレイキングとして、グループ対話などに時間を活用できるので今後も継続してほしい。
2. 機械情報技術学科3年生の3名が配属されたグループ3は、工藤昭雄氏（東北）と受け持ったが、少人数であるため学生諸君が多く話題に発言できる機会が与えられたことは喜ばしい。
3. グループ3は、基調講演と共通する課題をメインテーマとしていたために学生諸君からは最終処分技術が整っていること、および最終処分地の選定などには政策が大事であるとの発言があったことは対話会の成果であった。
4. また、対話会で話題になった「原子力施設が青森に集中している理由」、「国策民営である原子力について」などについてグループ発表で取り上げられ、これらの重要な政策的な課題について関心を寄せる機会が作られたことも対話会の一つの役割ではなかったかと評価できる。
5. 佐藤先生が学生の教育に積極的に取り入れている大間、東通、関根浜、六カ所などの原子力施設の見学を経験している学生から、原子力施設が危険であるとの考えが大きく減少したとの発言があった。メディアの原子力に対する批判的な報道に対しては「百聞は一見にしかず」が一番であるとの印象を改めて実感した。地の利のある八戸工大から、このような経験を身につけた有意な学生が社会に巣立つことを切に期待したい。

<三谷信次>

毎年参加させて頂いていることに感謝致します。自分が担当したのは、第4グループでシニアはSNW 東北の高橋実さんであった。学生は全員3年生でシ

システム情報工学科 5 名、電気電子工学科 1 名の 6 名であった。内 4 名が女子学生であった。

午前中学生達だけで最終処分について対話していたとのことである。男子学生 2 名はシステム情報工学科の特徴を活かして、対話を通して得られた情報は SNS を利用して地元住民にも発信できないか議論していたという。これは午後のシニアとの対話でも、対話成果として発表内容の一つに入れた。

一方女子学生 4 名に共通する点は、午前中の対話の前に「最終処分に関するエネ庁作成の DVD」を鑑賞した結果重要な問題点に気付いたようである。深度地下を走る輸送容器運搬のトラックは有人か無人か？有人なら運転手は被ばくしよう。運転手の安全は守られているのか？という鋭い指摘である。有人か無人かは現段階ではまだ確定しているわけではないが、仮に有人であったとしても大した被ばくにならないことを、現状の使用済み燃料輸送キャスク運搬トラックの運転手の例をシニアが示して納得したようである。

我々専門家が気付かなかったことではあるが、「現実に仮に自分達の地域に最終処分場がくるとい話が持ち上がり、理系の自分達がそのことに係る可能性」についてまじめに考えているなど推測された。彼らは地元が最終処分場の候補に上がったときにどのように振舞うか我々シニアよりも真剣に考えていることが分かった。

以上短時間の対話会ではあったが、佐藤学教授をはじめ八戸工大の先生方の腰の入った教育と学生達の成長ぶりを見るに付け、改めて皆様にエールを送りたいと思います。

<西郷正雄>

八戸工大での参加は、3 度目と思うが、前回（3 年前?）の学生たちの発言に比較して目覚ましく良くなっている。

昼食のせんべい汁を一緒にすることでの皆との和やかな雰囲気醸し出しは、いいですね。ただ、この時点では、一人積極的に話される学生がいたので、他の方の話を阻害しないかと心配はあった。

しかし、実際の対話会では、各自順番に質問を投げかけてもらって、対話を進めたので、必ずしもその学生の独り舞台にならずに、皆が平均して話してくれたので、良かったと思っている。

話題は、テーマを中心に行ったが、一人の方から、「高レベル廃棄物処分場の選定は国民の反対が強く決定できずにいるのだから、原子力発電は止めるべきではないか」と意見が出た。そのことにより、日本のエネルギー問題へと発展

したのは、私としては、良かったのかなと思っている。テーマは、高レベル廃棄物処分場ではあったが、幅広く意見交換でできたので、まずまずの成果が得られたと思う。

佐藤先生のご努力下、学生たちが、原子力・エネルギー問題について、真摯に考えているのを目のあたり見て、次回もできれば参加させてもらって、学生たちの変わりゆく状況をつかみたいと思っています。

<針山日出夫>

今回で11回となる対話会では、企画準備段階から懇親会まで入念な準備調整といつも乍らの温かいお気遣いをいただき、かつ大学側の総力を挙げてのご対応に深謝申し上げたい。

学生諸君とせんべい汁をいただきながらお互いが打ち解け、その流れをグループ対話に繋ぐことで例年通り対話は本音ベースの活発でかつ深みのあるものとなりました。今回のテーマは「放射性廃棄物の処理処分」という技術面・管理面で解決課題が多い喫緊案件でしたが、学生諸君の発表内容は一連の原子力体験学習カリキュラムの蓄積でエネルギー問題に対する論点整理が出来上がっており、それを下敷きにしてポイントを外さないものでした。これも日頃の先生方の人材育成への熱意とご指導の賜物と敬意を表したく存じます。シニアにとっても、世代を超えた対話は多様な内容と学生たちのこれからの将来の可能性を感じるもので、充実したひと時であり、達成感に満ちたものとなりました。

学生達が先生方の薫陶を受けて希望する道で立派に成長し活躍していつてくれることを切に願う次第である。

以上